ホームルーム活動の活性化に向けて
－初任者研修における班別協議から考える－

藤　井　義　一

はじめに

『高等学校学習指導要領解説（特別活動編）』には、ホームルーム活動に関して「青年期に共通する悩みや課題を、時期に応じてホームルーム活動の題材として取り上げたり、必要によっては教育相談を計画的に実施したりすることによって、個々の生徒が自ら問題を解決する力や自己を生かす能力を身に付けていくように援助していくこと」とあり、教師には「生徒の心情をよく理解しながら望ましい集団活動が展開されるよう援助する」能力を求めている。

また、平成７年度の兵庫県教育委員会『指導の重点』においても、「直接体験や間接体験等を通して、多様なものの見方、考え方を身につけさせる指導」や「望ましい集団活動を通して、児童生徒の自主的、実践的な態度の育成」を求めている。

日常的な指導のなかで健全な生活態度や問題解決能力の育成を図ると同時に、ホームルーム活動を有効な体験の場とすることが望まれているのである。

1　研究の概要

(1) 初任者研修の概要

教育公務員特例法第20条の２に基づく高等学校における初任者研修も、新任研としての試行を経て、平成７年で実施５年目を迎えた。この研修は「教員としての実践的指導力と使命感を養うとともに、幅広い知見を得させることを目的」として実施されている。

本県の高等学校初任者研修では、校内における60日の研修と、校外における30日の研修と、４泊５日程度の宿泊研修か文部省主催の洋上研修の受講が定められている。

校外における研修には、県下を３地区に分けて同時実施する「地区別研修」と、当所において宿泊をともなう「全体研修」とがある。

「校内における研修及び校外における研修は、基礎的素養、ホームルーム経営、教科指導、特別活動、生徒指導等教員の職務の遂行に必要な事項について実施するもの」（初任者研修実施校（県立高等学校）年間指導計画作成要領）とされていることを受け、平成７年度の「全体研修」では、各事項に関する講義、実習や協議を実施した。

大学教員等による講義は、専門的知識を改めて確認していく機会として好評であった。

また、教科別協議は、実際の教材研究・授業展開に直結した研修内容が、専門性を深め毎日の授業を振り返る機会となり、互いの工夫や実践による成果を共有したり、刺激を受けたりするよい機会となった。

同じく班別の形態で実施している演習・協議に、ホームルーム活動の進め方や事例研究がある。ホームルーム経営やホームルーム活動における指導の実践力を養い、問題行動の理解と指導に関する手法や各種の技法を使った協議方法の習得を目的として、実習や演習に重点を置いて実施した。

(2) 研究の目的

現在、ホームルーム活動における生徒の自主的自発的な活動が停滞しているといわれている。そこで、指導者である教師自身がその活性化を考え、楽しい活動計画を提示でき、指導・助言できる実践力を持つ必要がある。

また、生徒には多様なホームルーム活動の各場面で一人一人が自分の言葉で自分の気持ちを表現でき、同時に他人の意見を誠実に聞く姿勢を育てたい。その機会の一つとして、ホームルーム活動における協議活動に着目し、生徒相互が意見交換の機会として活用できる力を伸ばしたい。そのためには、教師自身が協議活動の展開について知識を持ち、状況に適した技法を活用できることが望まれる。

以上のことから、初任者研修の班別協議では、活動の活性化を促す力量を育むことを目標のひとつに設定した。今回の研究はその班別協議のいくつかを取り上げ、初任者の「受講しての感想・意見」を参考に集団

活動に対する意欲と、技法自体やその進行過程に関する興味・関心を検討した。初任者研修における効果的な班別協議の持ち方、進め方を考える中で、ホームルーム活動活性化を考察することを目的とする。

平成７年度の高等学校初任者研修校外研修（全体研修・宿泊研修）において実施した班別協議のテーマや方法は、次に示した通りである。

・提出課題無しでの自由討議
　テーマ「教職につくに当たっての心構え」
　（４／４実施・１班14～15名で構成）
○提出課題に基づく発表と自由討議
　テーマ「生徒指導上の諸問題」
　（５／24実施・１班12名で構成）
○ディベート体験
　テーマ「犬と猫ではどちらを飼いたいか」
　　「自動販売機は廃止すべきである」
　（６／28実施・１班４チーム３名ずつで構成）
○バズセッション形式による事例研究
　テーマ「問題行動の理解と指導の進め方]
　（６／30実施・１班３チーム４名ずつで構成）
・パネル＋ディベートの形式
　（パネルフォーラムにディベートの要素を入れた討議法）
　（８／１実施・１班20名で構成）
○ＫＪ法を使った協議
　テーマ「問題行動の理解と指導の進め方]
　（９／13実施・１班３チーム４名ずつで構成）
○シミュレーションゲーム
　テーマ「ホームルーム活動の進め方」
　（11／８実施・１班４チーム６名ずつで構成）
・ロールプレイング体験
　テーマ「カウンセリングの基礎技法」
　（２／２実施・１班15～16名で構成）
・提出課題に基づく発表と自由討議
　テーマ「国際理解教育の推進」
　（３／７実施・１班18～19名で構成）
・提出課題に基づく発表
　テーマ「１年間を振り返って」
　（３／８実施・１班10～11名で構成）

上記10回の班別協議のうち○の５回について、以下にその方法の概要を述べ、分析・考察を行う。

(3) 調査の対象

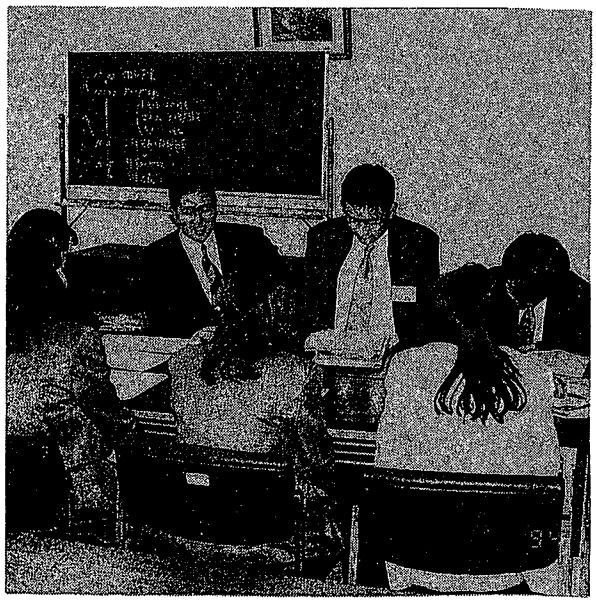
教　科	男	女	合計
国　語	5	16	21
地　歴	2	2	4
公　民	1		1
数　学	5	2	7
理　科	2	1	3
保健体育	5	2	7
美　術	1		1

英　語	7	14	21
家　庭		23	23
農　業	4		4
工　業	1		1
商　業	1		1
看　護		2	2
合　計	34	62	96

(4) 凡例

・２章の表の中の数字は実人数、文中の百分率は小数第一位を四捨五入したものである。
・２章の帯グラフは、各設問に対する回答を百分率で表したものである。

はい
どちらともいえない
いいえ



2　班別協議の実施概要と分析

(1) 自由討議（提出課題に基づく発表）　「生徒指導上の諸問題」

①実施概要

事前に作成・提出を指示した課題（提出様式Ａ４判縦１枚）

生徒指導上困難を感じていることや悩んでいることについて具体的にまとめたもの。末尾に、特に協議したい問題点を箇条書きにする。

進行　<40分>　自己紹介（所属・氏名・教科等）の後、各自の提出課題に従って、３分程度で教員生活での喜びとともに、悩んでいることや生徒指導上で困難を感じていることなどを発表する。

<50分>　発表の中から２つ程度の話題を柱として協議をすすめる。

例１　先生と生徒との人間関係

２　授業における先生と生徒の関係

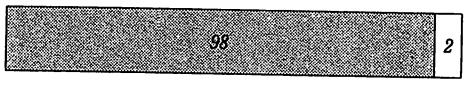
３　部活動における人間関係

４　職場の人間関係

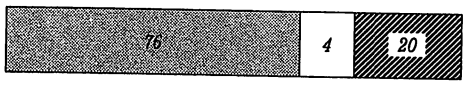
研修のポイント：相互に意見交流できる人間関係の構築と現在の悩みを共有することによる集団の一体化

②実施後の分析

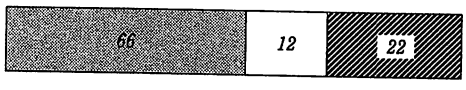
１　指示されたテーマの内容に興味・関心がありましたか。



２　今回の班別協議に積極的な参加ができましたか。



３　協議内容は今後の指導の自信につながりましたか。



４　今回の協議の方法をおもしろいと思いましたか。

協議方法をおもしろくなかったと答えた者の理由は、協議の中から具体的な解決策が出てこなかったことや協議の形態がこれまでやったことのある話し合いと同じで新たな工夫がないという意見であった。

おもしろかったと答えた者のうち、今回の協議により、今後の指導の自信が生まれてきたと答えた者が70％であるのに対し、おもしろくなかったと答えた者のうち自信ができたと答えた者は38％しかいなかった。

テーマに以前から関心があり、かつ協議に積極的に参加できたと答えた者のうち73％が今後の指導の自信につながったと答えているのに対し、関心がなかったり、あるいは積極的な参加ができなかったと答えた者の中では48％しか今後の自信につながっていない。

	テーマに関心あり	テーマに関心なし
積極的に参加できた	70	2
積極的に参加できなかった	23	0

協議への積極的な参加態度を生む要因には、テーマに関する興味・関心の有無と同時に、班の編成人数やメンバー相互の親密さも大きいと考えられる。勤務校や現在の校務分掌、生徒の実態等の違いによる問題意識の差があるが、協議している内容を自分の今後の指導の参考にしようという積極的な姿勢を全員に持たせることが内容の充実につながっている。

現在勤務している学校の校種や課程、地域等に関係なく本県の教師としての視野で問題を考え、幅広い見識を持つよう意識させるには、事前のガイダンスが有効である。同時に、より多くの者が協議の方法それ自体をおもしろいと感じるように設定上の工夫、例えばロールプレイングや体験発表等を応用したい。

提出された課題から問題点を整理し、班編成の要素の共通性を高めたり、課題の指示内容をより具体的にすることにより、身の回りに実際にある諸問題に気づかせることが今後の課題である。

(2) ディベート　「ホームルーム活動の進め方」

①実施概要

説明　　全員に「ディベートのねらい・ルール・三要素」等について説明する。

その後、各班（1班4チーム3名ずつで構成）にわかれディベートをする。

今回のルール・進行

1．今回のテーマは「犬と猫ではどちらを飼いたいか」・「自動販売機は廃止すべきである」

2．代表が肯定側、否定側を決める。

3．進行と時間制限　「立論」肯定側・否定側　各3分

作戦タイム　3分

「反対尋問」否定側・肯定側　各6分　（挙手で中間判定）

作戦タイム　2分

「最終弁論」否定側・肯定側　各2分

4．判定・評価　判定班に、簡単な講評と判定を聞く。

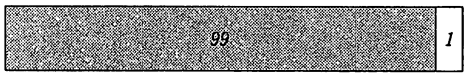
研修のポイント：ディベートの立論や反対尋問の準備のための班内での協議とディベート上の担当した立場からの意見交換による活発な討議の機会の確保

②実施後の分析

1　ディベートに興味・関心がありましたか。

2　今回のディベートに積極的な参加ができましたか。

3　今回のディベートをおもしろいと思いましたか。



ディベートに興味・関心があり、かつ積極的に参加できた者のうち94%が今後の使用を積極的に考えている。また、ディベートに興味・関心がなかったり、今回積極的に参加できなかったという自覚のある者のうちでも91%が今後の活用を考えている。

	ディベートに興味・関心あり	ディベートに興味・関心なし
積極的に参加できた	62	20
積極的に参加できなかった	9	3

また、ほとんどの者が今回の班別協議を楽しかったと答えていることは、ディベートそれ自体が生徒たちにも受け入れられやすい証であろう。ディベートという技法は、多様な利用の可能性が高いと言える。

ディベート体験が初めてという者がほとんどの状態の中で、積極的な参加意欲の喚起のために詳細なレジュメを準備したことや班別研修の前に全体に対してディベートに関する講義を行ったことが好結果につながった。新しい技法の使用に関しては、事前の丁寧な準備と説明の機会を大切にしたい。受講後の、今後のこの技法使用に関する意欲の高さから考えると、新しい技法の紹介は、生徒の新たな体験や活動に直結していると言える。

当所としても、ホームルーム活動に限定することなく、教科指導の場においても普及が可能なように助言や支援を含めた積極的な対応と研修の機会を準備していきたい。

ディベートを体験した者が、指導者として生徒にディベートをやらせてみようという気になるためには、実際に自分が体験したときの斬新な気持ちと感動が大きな要素であり、推進力になると考える。最初からあまり困難と思われる目標やテーマを設定せず、何度かのディベート実践の中でテーマや展開の技術的なレベルを上げていくことが望ましい。

また、ディベート実践を1回の実施のみで効果や正否の判断をするのではなく、何度も実践していくなかで改善すべき課題が明らかになってくることを受講者に対して特に強調した。

(3) バズセッション（事例研究）　「問題行動の理解と指導の進め方]

①実施概要

事例と協議テーマ例

A子がスーパーマーケットで化粧品を万引きし、スーパーの警備員に補導された。連絡を受けて担任がスーパーに行くと、すでに母親も来ていた。母親は「代金を払えばいいのでしょう」と言って、代金を支払い、詫びることなくA子をつれて帰宅した。

A子は一週間の家庭謹慎となった。一週間目に家庭訪問を行ったが、家にはA子だけしかおらず、A子は所在なげにテレビを見ていた。担任はA子と少し話をした後、「明日から学校に来なさい」と言って帰宅した。

・母親を始めとする家庭の教育力について　・家庭謹慎の在り方について　・担任の指導について
・A子の今後の生活についてどう指導するか

進行

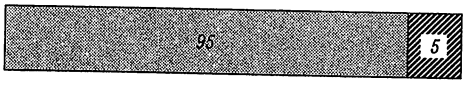
上記等の事例を6種提示し、3～4人の小集団でそのうち2種について協議（計80分程度)、同時に残りの事例についても疑問点・質問事項を整理しておく。

3つの小集団が集まって各小集団の発表（計60分程度）と相互に質疑応答（計30分程度）を行う。

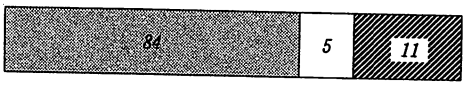
研修のポイント：小集団における事例に対応した指導内容の検討協議と大集団における発表や応答を通した建設的な意見交換の経験

②実施後の分析

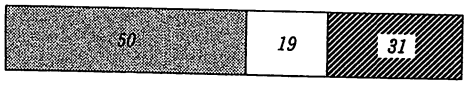
1　今回の事例に現在、興味・関心を持ってましたか。



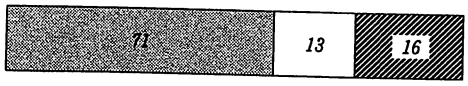
2　今回の班別協議に積極的な参加ができましたか。



3　今回の協議が今後の指導の自信につながりましたか。



4　バズ形式の協議をおもしろいと思いましたか。



バズセッションの形式をおもしろいと思い、かつ協議に積極的に参加できた者のうち63%が今後の指導に自信ができたと評価しているのに対し、おもしろくなかったり、積極的に参加できなかったと答えた者のうち75%が今後の指導に対して不安であると答えている。

16%の者が、今回のバズ形式を面白くないと感じている理由は、小集団での協議が特定のメンバーにより強引に進行したと感じていることや、小集団では充実した話し合いができたが、人数が多くなる全体協議では焦点化が困難であったなどである。

	バズ形式はおもしろい	おもしろくない
積極的に参加できた	62	17
積極的に参加できなかった	5	10

提示した事例［反社会的行動（万引・喫煙・暴力行為）と非社会的行動（怠学・深夜徘徊・服装違反）］が、現在指導している状況に合っていたことが、積極的な討議態度につながっていた。その結果、問題解決の方向や生徒等への実際の指導に関しても自分なりの解答の発見につながったようだ。

自分の関心を持った事例に関しては、協議にしても問題点の指摘にしても適切であると評価できるが、現在直面していない事例に関しては話し合いが深まらないことは問題である。また、それぞれの事例に関しても自分が興味があるからであろうが、瑣末と考えられる部分にこだわった発言に終始する傾向がある。幅広い視点や自分と違った考え方を尊重する態度を養う方向を示唆したい。

(4) ＫＪ法　「問題行動の理解と指導の進め方」

①実施概要

今回のテーマ　「授業、あるいは学校行事やホームルーム活動に対して無気力な生徒をどう指導するか」

1【ラベルづくり】　一人一人がテーマに関し、思いつく問題点・意見・解決策等をラベルに書き込む。

2【ラベル並べ】　一度読み上げて全員の賛意があればテーブルの中央に重ねる。
二巡しても構成員の手に残っているラベルは（一匹狼）として別に置く。

3【表札づくり】　同一内容のラベル群について、内容を要約した［表札］を作る。

4【ラベル整理】　ラベル群の中の代表的な意見を２～４枚選んで、白色ラベルに清書する。

5【図解化】　①　［表札］を空間配置し、グループごとに《島》を作る。
②　《島》間の関連づけ（影響力の大きさによって線の太さを変える）
③　《島》ごとに、シンボルマークを作り適当な位置に書き込む。
④　結論としてのタイトルをつける。

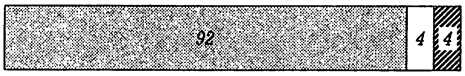
6【文章化と発表】図式化された論理の展開をもとに課題の解決について文章化し、発表する。

研修のポイント：ラベル並べ時における討議の徹底と図解化時の作品完成への協力意識を持った協議

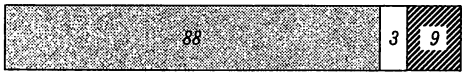
②実施後の分析

1　今回のＫＪ法を以前から知っていましたか。

2　今回の班別協議に積極的な参加ができましたか。



3　協議内容は今後の指導の自信につながりましたか。



4　ＫＪ法を今後の指導の中で使おうと思いますか。

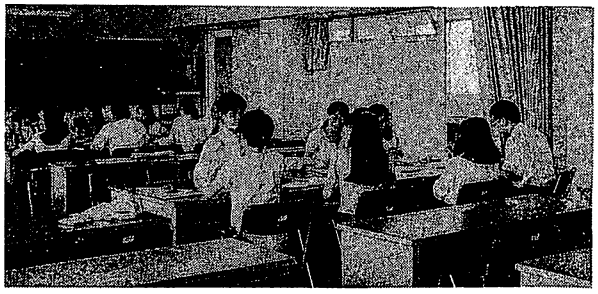
今後、ＫＪ法を教科指導やホームルーム活動の指導に利用する気のない13%のうち多くの者は、現在関わっている生徒の実態や、時間の確保の難しさから実施は困難であると考えているようである。

	内容は今後の指導に役立つ	ＫＪ法を今後使ってみたい
積極的に参加できた	75	68
積極的に参加できなかった	4	2

積極的に参加できた者のうち、テーマに関する協議内容が今後の指導の役に立ちそうだと考えている者が88%いるのに対し、ＫＪ法という技法そのものを今後の指導の場面で使ってみたいと考えている者は80%であり、この差はＫＪ法という技法そのものの持つマイナス面、すなわち時間がかかるという点や「表札」や「ラベル」の相互関係の図解化の難度の高さ等が大きな原因であると考えられる。

事前に、ＫＪ法実施の流れを解説したが、技法の理解に時間をとられ、テーマについての掘り下げが不十分の班があった。本来、ＫＪ法において最も時間のかかるラベル並べや表札づくりにおける時間配分が短く、十分に討議ができなかったことも反省すべきである。

この技法は、状況や問題点の相互関係の整理には有効であるが、解決策を明確に読み取るためには訓練と習熟を必要とすることが、現実の実施上の問題点の一つである。この点から、果たして、ＫＪ法という技法がホームルーム活動の中で活用できるかどうかは生徒の状況等を考慮して決めなければならない。ブレーンストーミングやフィシュボーンといわれる方法等の使用を含め、今後の初任者研修においても、生徒相手にやってみようという興味や面白味を感じる協議方法となるよう、展開方法を考えていかなければならない。



(5) シミュレーションゲーム　「ホームルーム活動の進め方」

①実施概要

シミュレーションゲームは体験学習の一つで、実際の状況下で起こる（起こりうる）出来事を模擬場面の中で体験し、対応の仕方から学ぶ技法で、“ＮＡＳＡゲーム”や“教育ゲーム”とも呼ばれている。

「冬山で遭難！さあどうする」「砂漠で遭難！さあどうする」等非常事態の中で生き残るために、指定された10～12の品物に必要順位を、まず個人で、次いでグループで決定する。

1．期待される効果

(1) 自分の思考や行動がゲームの中で試され、そこから創造性や自発性が開発される。

(2) 参加者間のコミュニケーションと自己理解、他者理解が促進される。

(3) グループ活動の質を計量的に把握できる。

2．実際の展開

(1) 問題文を読んで、個人で必要性の順位をつける。理由を含めて、10分で記入。

(2) 全員で話し合って、全員の合意でグループとしての順位をつける。時間は30分。

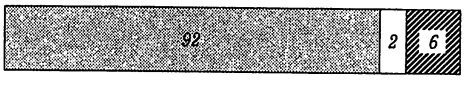
(3) 専門家の作った妥当解との差を数値的処理をする。

研修のポイント：グループの合意を求める過程における合理的な討議と多様な視点からの発想での意見の交換による相互理解

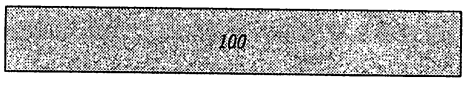
②実施後の分析

1　今回実施したようなゲームを知っていましたか。

2　今回の班別協議に積極的な参加ができましたか。



3　今後の指導に使用しようと思いますか。



初任者の積極的な参加意欲や終了後の達成感や充実感の高さは一連の活動の中では際だっていた。その理由として、ゲーム的要素の強い点が楽しみながらの自由な意見交換につながっていると考えられることや、妥当解の発想の意外さがゲームとしての完成度を高めていることなどがあげられる。

なお、進行手順がしっかりと準備されており、個人決定・集団決定・採点・振り返りシート・全体発表という流れがリズムよく進行していることも、受講者の今後の使用意欲につながっていると思われる。

集団活動を数値化して評価しようとする試みは、今回好評であった。しかし、これらの活動には、はっきりとしたかたちで数値化できない部分が存在することを常に考慮し、評価する姿勢を持ち続けることが同様に大切である。

実施後の満足感は、設定のねらいどおりであったが、これらの活動は使用時期や使用目的の限定が必要な活動であることが理解されたかという点では不安が残る。

受講者が楽しめることは、生徒も準備と展開次第で十分に楽しめるであろう。協議で作り出す仕事量を数値的に表現し、目に見える形で提示しようというねらいは、説得力と意外性で受講者を引きつけたと評価できる。しかし、実施に際し振り返り作業が最も重要であることを理解させたり、ホームルーム活動における設定理由を明確にする等の準備が必要であろう。

今回受講した初任者の全員が、今後ホームルーム等で是非実施したいと答えていることからも、この技法が学校で受け入れられる可能性は高いが、可能なら一歩進んで状況設定や問題を作ったり、意外性がありしかも説得力のある妥当解をも考え出そうとする積極的な態度が望まれる。

3　考察

初任者研修における班別研修の実践から、ホームルーム活動活性化にむけての方策を考察した。

まず、指導する者がやってみておもしろい、楽しかったという体験を積むことが重要である。それらの体験での技法の導入は、活動活性化に有効である。研修時の各技法の体験がおもしろければ、それと比例して、今後の使用意欲と討議内容の有効性に対して積極的で肯定的となることが、集計結果からもわかる。そして、楽しい体験という段階で終わることなく、指導者としての力量を培い、高める意識を持つことや、意図的にホームルーム活動での討議活動の定着を設定するという意識を持つことが大切である。

次に、活動の過程における話し合いの時間・内容を積極的に評価する姿勢が大切である。今回、協議の結果に完成度の高いものや教育的に立派な内容を求めすぎた初任者の一部に、次への意欲を阻害する傾向としてあらわれたことからもいえよう。

また、活発な協議を求める方法に、技法の目新しさにのみ頼りすぎないことも大切である。つまり、新たな技法を求めることも必要であるが、既知の討議方法についても改善や工夫を加え、参加者の発言が自発的であり、しかも成就感につながるような配慮を考えることが望まれる。発言が自然な進行の中で必然的に喚起できる状況が望ましい。

なお、討議結果がホームルーム生活の各場面で有効なものであることが、その討議方法の定着の大きな力となるということも、各種のホームルーム活動の内容を考え直す場合に必要な視点である。それは、初任者研修における新たなプログラムを編成する方向の一つを示していると思われる。

最後に、人数の件がある。当所での班別協議は、なるべく一つの班の人数を少なくし、研修の協議・討議における発言回数や意見交換の機会が物理的にも増えるように配慮してきた。一方、学校における実施の場合は40名のクラス定員や実際の運営におけるリーダー不足から困難な点もあるであろう。

しかし、「個に応じた」「個を尊重した」教育の推進が望まれている点からも可能な限り一人一人の生徒の活動が指導者に見え、生徒相互に発言や行動を評価しあえるよう進行等を設定していくことが求められている。指導者の配慮と工夫が最も求められて、またその効果が最も期待できる点でもあろう。

新しい技法に興味を持ち、その収集と習得に努めることは大切である。同時に、それらの目的が、生徒の心を揺さぶる技法の発見であり、やってみようという意欲を生徒一人一人に拡げていくことであることを忘れてはならない。

初任者研修を初めとするいろいろな機会で自分が体験しながら感じたことを、いろいろな生徒の立場に立ってどう生かしていくか考えてみることが求められている。つまり、それらの活動を実際に行っている生徒の気持ちを指導者としてどう受けとめ、設定した目標に導いていくかを考えるに際し、自分の経験を役立てようとする意識が大切である。

おわりに

学校でホームルーム活動を指導している担任の先生方にご一読いただき、参考にしていただければ幸いである。

今後、初任者研修における各種の協議体験が学校におけるホームルーム活動の指導に際し、どのように使用・展開され、どの点が活性化に有効・効果的であり、あるいはどのような改良や改善が必要であるかを過去の初任者研修の受講者に対する調査により、明らかにしていかなければならない。そのことが、今後の初任者研修のプログラム設定のみならずホームルーム活動の指導やその活性化にむけての努力すべき方向を示すと考えられる。

各協議を通して技法や展開に関する新しい知識を得た初任者の先生方が、問題意識を持ち、更なる研鑽により指導力を磨き、学校での積極的な使用により一層大きな成果を上げることを願い、この研究のまとめとしたい。

参考文献

- 高等学校学習指導要領解説（特別活動編）1990
- 吉田和志『ディベートをどう指導するか』明治図書 1995
- 川喜田　二郎『ＫＪ法』中央公論社　1986
- 立教大学キリスト教教育研究所『Creative O.D.』1982
- 武田　建『新しいグループワーク』ＹＭＣＡ出版 1992

研究紀要　第107集

発 行 日／平成8年5月25日
編集発行／兵庫県立教育研修所
所長　陰　山　　茂
兵庫県加東郡社町山国2006-107
電話（0795)42-3100(代)
印 刷 所／田中印刷出版株式会社